

# 謠曲の仕舞を遊戲せし形

京城庚子記念幼稚園

大和田　り　よう

こちらは、御承知の通り、冬は、零下何度と申す

寒さでとても運動場には出られませんから、屋内で出来る運動で何か變つたものをご思ひまして、夫れには當地は娛樂の少ない處ですが、謠曲は非常に流行し、通園幼兒の父か母かの謠はぬお家は稀な程で、自然幼兒等も耳なれて居るので、こゝに考案致しましたのが今申上やうといふ遊戲です。

小謠中のむづかしい節の(クリ)や(入)等のすけない歌詞の平易なるを選び之れに仕舞の形を五つ六つとり小舞と致しました。

四五年前に考案いたしました、家庭でも、夜分父君又母君の地で又來客の時など餘興にもなると歡迎されて居りますが、小舞も仕舞も普通の場合一曲一人で舞ひますのをかく大勢にて致すのが考案でしたがつて色々無理な處もありましようかと今式日の分を左に申上て、皆様にお直しを願ひます次第です。

鳥帽子折五月端午

皇帝天皇

西王母三月

土車元旦

始めと終りは皆同じであります。各兒扇子を持ちて(圓形でも出来まゝ)。只樂器に合へぬ丈です。今直線で致しますのを申上ます。

一回二十人位二人づゝ二列となりて、洋琴に合せ出て參ります。程よき處にて一列は後に、一列は前に並びて二側に座します。前の一列シテトナリまひ、後の一列地となり唱ひます、前後とも扇を改めて下に置き(膝の前)更に扇子をとり上げ、前の列は構へ、後の列は謠ふように構へ、前列一句唱ひ、立ち上れば後列其先を唱ひ前列舞始め、終れば更代して後列前に出て舞ひ始めます。

式の時はお薬や織紙其他にて作りたる冠をかむり、西王母や義經になります。

土　車

歌詞

一天四海なみを打ち始め給へば國も動かぬあらか

ねの土の車の吾等迄道狭からぬ大君の御影の國なるぞ有難き。

形

前列構へ同時ニ扇  
擴げて此一句唱ふ  
一天四海波を

立ち此一句より以  
下後列全部唱ふ  
打ち治め給へば

前進  
國も動かぬ

あらかねの

右手扇で圓  
形をかく  
土の車の

左手で自分  
を指す  
吾等迄

一週する  
道せばか

らぬ

もとの位置になほる  
大君の御影の國なるそ

打込下に居る  
ありがたき

西王母

歌詞

三千とせになるてふ桃のことしより。なるてふ桃  
の今年より花咲く春に逢ふ事も唯是君の四方のめ  
ぐみあつき國土の千々の種桃花の色ぞ妙なる。

形

前列同様  
前列一句唱ふ  
みちとせなるてふ桃の今年より

立後引諸ひ始  
なるてふ桃の

拍子一つ  
今年より

立ち前進  
花咲く春に逢ふ事も

居立ちて扇子頭  
の上にかざす  
たいこれ君の

じきする  
四方のめぐみ

廻りて元の位置に歸る  
あつき國土の千々の種

かざし  
桃花の

打込下は居  
色ぞ妙なる

烏帽子折

歌詞

かやうに祝ひつゝ程なく烏帽子折りたてゝ花やか  
に三色組の烏帽子懸緒取り出し氣高く結び濟し召  
されて御覽候へとお髪の上に打ち置き立ち退きて  
見れば天晴れ御器量やこれを弓矢の大將と申すど  
も不足よもあらじ。

形

前列同様前列唱ふ  
かやうに祝ひつゝ

後列之より唱ふ  
前列立上る  
程よく烏帽子折りたてゝ

前方の方に出  
花やかに三色組の

下に居立  
烏帽子懸緒取り出し

兩手に  
氣高く

擴げて  
結び濟まし召されて

兩手にて扇子を  
捧げて  
御覽候へとお

お髪の上に  
のび上るて見る心

にて頭の上に置  
打ち置き

後方に下り  
立ちのきて見れば

天晴お器量や

かざし  
これぞ弓矢の大將と申すも不足よもあらじ

皇帝

ことぶきなれやこの祝ひ天長く地久しくてつくる時  
もあるまじ。

形  
後列も之れのみは始め  
から唱ふ前列唱ふ立

前方に出  
邊に伏せ

扇を高く掲げし扇下膝の

ことぶきなれや この祝ひ  
かざし  
之の位置下に居る  
つる時も

（猶始めは此構へが一番むづかしくありました）が年長の子丈致して、後は見る役にして置きました處、見て覺へたのでせうか扇子を持つと、直ぐに構へまして、たやすく出來ます。一寸時候がはづれて居りますが序ですから今年の節句の時の事を申上ます。

學齡前の幼兒は十人を、皆「シテ」と致しまして、四十人丈はだいたひ様初め小野の小町高砂の爺や姥又左右大臣公卿其の他になして、人形のおひな様のそばに生雛様として、一人づゝ樂屋から一番年少の子に連れさせて來まして、壇上にかざります。かざりますと、おひな様に是からお舞を御覽に入れますと奏問して、洋琴を始めますと、前申した西王母の一隊が出て參り、形の如く致します。夫れがすみますと、旅の衣にすゝかけのぞ申しますと、此度は男幼兒二十人山伏の装束で出て來り、出揃ひてから洋琴に合せて場の中央を一週させます。恰度、雛様の前に立ちますと、勸進帳の代りに節句の唱歌をくり返し唱ひます。一週致しました時はポプラの金剛杖を洋琴に合せてつき立てますので賑やかです。次は年少の幼兒等の遊戲や唱歌やお話で、お雛様を撤廢してから全幼兒其他に赤飯と相當の副食物を

一齊のお辨當に入れて今日のお祝ひとして頂かせます。殖民地故、内地のかゝる行事を印象させて置く必要があると思ひまして、之れも四五年前から始まりました。お赤飯丈でも、三斗も致します、夫れに雛様始め夫々の仕立に一寸時間がかゝりますが役割をくじ引きで致しますので役にあたつたお子のお母さん等が手傳に來てくださるので、お赤飯がゝりや裝束がゝりと夫れは／＼賑であります。

某商店の輕氣球の昇れるを見てK子曰く、

「あれは何等まであがるのでせうね」

傍のM雄これに答へて、

「天まであがるのさ」

K子重ねて

「そうして、天の神様につつかるの？」

といへば、M雄はつよく頭をぶつかて、

「いえ、ぶつかりはしないさ。そうすると、神様は雲にのつて、ずつと向ふへいらつちやるのです」。